

沖縄県立図書館の沿革と現況

——郷土資料を中心に——

富島 壮英

沖縄県は、人口一〇九万人、面積約二、二四四²km²である

が、数多くの離島（有人島四五）を抱え、図書館のサービ
ス・エリアは極めて広範囲である。その数多くの離島群を
大別すると三つになるが、県立図書館は、沖縄群島の那覇
市に本館、宮古群島の平良市に宮古分館、八重山群島の石
垣市に八重山分館が設置されている。蔵書は、本館五二、
〇五七冊、宮古分館一八、二六三冊、八重山分館一八、七
一四冊、総計八九、〇三四冊（昭和五二年三月末現在）で、
職員は、本館一四名、両分館各三名、計二〇名で運営され
ている。

ちなみに、全国の県立図書館の平均と比較すると、職員
数で約二分の一弱、蔵書数で約三分の一弱、年間資料購入
費で約三分の一強ということになる。戦災でゼロから出発
したとは言え、その較差は益々ひろく一方で、慨歎すべき

現況である。

以下、戦前・戦後の県立図書館の沿革と現況について、
郷土資料を中心に紹介する。

戦前の県立沖縄図書館

県立沖縄図書館は、最後の琉球国王尚泰の遺志として三
千円が県に寄附され、それを基金として、明治四三年八月
一日開館した。初代館長（囑託）は、沖縄県における最初
の文学士で、「沖縄学の父」として有名な伊波普猷が就任
した。

開館当初の蔵書は、一、八九二部四、五六〇冊、施設
は、建坪七五・五坪、閲覧室は、一般・児童・婦人室、合
わせて八〇席余で、職員は、三名であった。蔵書は、その

後、大正五年八、五〇〇冊、同一一年一二、六〇〇冊、昭和一五年二五、〇〇〇冊と漸次増加し、昭和一九年には三〇、〇〇〇冊に達した、という。

県立沖繩図書館の一大特色は、その郷土資料の豊富さにあり、そのため広く内外に知れわたり、沖繩研究の宝庫といわれた。この郷土資料は、後に第二代館長となる『沖繩一千年史』の著者・真境名安興が、伊波館長と共にその収集に全精力を傾注したが、その間の経過を彼は次のように言っている。

明治四十三年に至り県立図書館の設立せらるるや、内外各種の書籍を蒐集するの外、専ら力を郷土研究の資料に集注し、百万之が搜索に努め購入すべきもの、騰写すべきもの、或は篤志家の寄贈を勧誘し、或は保管の委託を受くる等あらゆる手段方法を尽して之が蒐集に努められたり。(中略) 爾来十有余年の星霜に涉り鋭意蒐集せられし各種の郷土研究資料は、今や書架に推積充滿し内外の書籍資料殆んど網羅し尽す(県立沖繩図書館編・刊『琉球史料目録』大正一三年)

このように収集された郷土資料は、大正一三年二月現在で八九八種四、九九二冊で、特に旧琉球王府時代の各役所の公文書類に特色があったが、昭和四年三月末現在では、一、六八四種五、九七〇冊に増加している(同館編・刊『郷土史料目録』)。この五年間の増加は、七九六種一、〇

五三冊で、家譜・系図、拓本類、間切(村)公文書等が中心である。

沖繩図書館の郷土資料は、大正一三年と昭和四年の目録しか刊行されていないため、戦前のその後の増加の状況は不明であるが、昭和八年に琉球歴代の外交文書『歴代宝案』二六二冊(筆写副本同数)の移管や『那覇変遷記』沖繩童謡集』の著者・鳥袋全発が、第三代館長として昭和一〇年から五ヶ年間に任していること等を考え合わせると、郷土資料は七、〇〇〇冊程度まで増加していた、と考えられる。

このような図書館を柳宗悦は「地方的特色ある図書館としては、慥かに日本随一のものでありました。どんな沖繩学者も、この図書館を訪れることなくして、正しい研究を遂げることは出来ませんでした。それほど沖繩に関する文献は、完璧に近く、世にも貴重な蒐集でありました。それといふのも三代に渡って沖繩第一の学者が、館長になってをられたからであります」と評している。けだし、高校・大学の高等教育機関の無かった当時の沖繩においては、図書館が郷土研究の中心となるのは、当然の結果であっただろう。

三〇余年の長い年月で収集された資料も、やがて戦局の悪化に伴い、その疎開が重要問題となった。しかし郷土資料の一部を羽地村源河等に疎開しただけで、沖繩は全土に

わたつて米軍の空襲にさらされた。最後の図書館長城間朝教氏は「空襲の中でも貴重本の取り出しに必死の努力をしたが、到底力及ばず四〇年の長い歴史と伝統を誇る沖繩図書館所蔵三万冊の図書はことごとく灰燼に帰してしまつた」と回想している。

戦後、疎開先の源河から『歴代宝案』（写本）九五冊と図書館裏の防空壕からジャバ糖業資料（洋書）が発見され、現在那覇市立図書館に所蔵されているが、これが唯一の記念品である。

戦後の沖繩県立図書館

昭和二二年三月二日、沖繩民政府から琉球列島米軍政本部宛出されていた「図書館再建に関する申請」が認可されたことにより、戦後の図書館の再建の歴史は始まつた。認可条件は、「中央図書館ヲ那覇ニ設置シ、他ノ人口稠密地域ニ三箇所分館ヲ設ケルコト」であつた。

この認可を受けて昭和二二年四月一九日沖繩中央図書館石川分館が開館し、同年八月九日中央図書館が知念村の民政府構内に、同一〇月一五日首里市役所会議室に首里分館、同一月一日名護中学校の一教室に名護分館が各々開館した。しかしこの頃の各図書館は、コンセット建物であつたり、他機関の一部を間借りする状態で、施設は極め

て不十分の上、蔵書も四館合計二、七〇〇冊であつたといふ。固よりこれらの資料も県内で収集されたものではなく、米軍が上海から持って来たもや台湾同郷会連合会の寄贈、疎開先から帰還した人達の寄贈等雑多なものであつた。そのため日本々土やハワイ等の県出身者の団体及び個人に図書寄贈運動を展開し、一定の成果を得た、といふ。

昭和二六年二月、中央図書館が那覇崇元寺跡に新築落成したが、その時点で米軍の直接管轄となり、名称も那覇琉米文化会館に改め、また石川分館は石川琉米文化会館に、名護文化会館は名護琉米文化会館に各々改称され、米軍の直接管轄となつた。

一方首里分館は、昭和二四年二月三一日独立して首里図書館と改称し、従来通り民政府の管轄下にあつたが、これが現在の沖繩県立図書館の前身である。その後、昭和三五年一二月、中央図書館に改称されるが、昭和三九年現在地に新館が建設されるまで、実に八回も移転を重ねている。その間の蔵書の状況は、次の通りである。（次頁の表参照）

このような状況が改善に着手されたのは、昭和三九年現在地に新館が建築された以後であつた。軍政府直轄の琉米文化会館（那覇、コザ、石川、名護、平良、石垣の各市）や琉球大学附属図書館の整備に力が傾注され、公共図書館は放置の状態にあつた。

従つてその間の郷土資料は、戦災のため県内での現物収

年度	首里(中央)図書館	宮古図書館	八重山図書館	合計
一九五四	二、一九八冊	一、九〇七冊	二、四三九冊	六、五四四冊
一九五六	三、一九六	二、〇六二	二、九三七	八、一九五
一九五七	三、三八〇	二、一〇二	三、二六八	八、七五〇
一九五八	三、〇四八	二、三五二	三、五九四	八、九九四
一九五九	三、〇八二	二、四五七	三、六五三	九、四九二
一九六〇	四、〇一〇	二、四五七	四、三五九	一〇、八二六
一九六一	—	—	—	二、三七九
一九六二	—	—	—	二、六九九
一九六三	—	—	—	一五、六〇三
一九六四	九、一七一	五、七七六	六、六五六	二一、六〇三

(1) 右の一九五四～六四年度の職員数は、首里(中央)図書館が四名、宮古、八重山図書館は、各二名であった。

(2) 首里(中央)図書館は、現在の県立図書館本館の前身で、宮古、八重山図書館は、宮古分館、八重山分館の前身である。

(3) 統計は、琉球政府文教局『教育要覧』に拠る。

集は不可能であり南方同胞援護会を始めとする本土からの寄贈本がその中心で、独自の収集活動は皆無に等しい、と言つてよい。

琉球大学附属図書館や沖繩史料編集所が県出身研究者の個人蔵書(文庫)を購入したり、また国会図書館、東京大学史料編纂所を始め各省庁図書館、県立図書館等の調査をし、沖繩関係資料のマイクロ化等積極的な収集活動を早い時期から始めていたのに対し、沖繩県立図書館は、予算や職員の関係で、復帰後に開始したばかりである。

現在、沖繩県立図書館の郷土資料は、本館八、一八〇冊、宮古分館二、三三二冊、八重山分館一、五四二冊、合計一二、〇五三冊(昭和五二年三月末現在)で、本館には別棟の郷土資料室(東恩納文庫、鉄筋コンクリート平屋、約四〇坪)があり、三つの文庫(特殊コレクション)が設置されている。以下この三つの文庫を簡略に紹介して、この稿をとりじたいと思う。

(一) 東恩納文庫

この文庫は、故東恩納寛惇氏(一八八二～一九六三年、那覇市東町出身、元東京都立大学・拓殖大学教授)の蔵書を基に昭和三八年七月九日財団法人として創立開始したものである。沖繩戦で県立沖繩図書館、尚家等を始め家々個人の蔵書まで大方灰燼に帰した中で、半世紀余りにわたって収集され、幸いに戦災をも免がれ、まとまった郷土資料としては、ほとんど唯一と目している。東恩納氏の蔵書が注目を集めたのは、昭和二六年頃からであった。東恩納文庫と東恩納氏を沖繩に招き、同時に氏が後進の指導に当たるといふのであったが、開館を目前にして、氏は永眠された。

その後、財団は、財政的な行き詰りから昭和四〇年四月一〇日正式に琉球政府に移管され、以後政府立中央図書館の管轄になった。復帰後、沖繩県立図書館に継承され、現

在、郷土資料のセンターとして運営されている。

文庫の蔵書は、総数三、三八四点であるが、その半数近くが沖繩関係資料である。その主要なものを上げると、歴代の冊封使の復命報告書である『冊封使録』、中・近世の外交文書の『歴代宝案』（第一集）の原本影印本二四冊・同筆写本三〇冊、江戸時代の庶民教科書として有名な『六諭衍義』の各種本約一四〇冊、一六〇五年僧袋中によって著わされた『琉球神道記』原本影印本・慶安本等の刊本・写本類、『首里古地図』等の地図類、『首里・那覇図』『唐船図』『琉球人行列図』等の絵図類、『安国山樹華木碑記』等の碑文の拓本類、程順則、鄭嘉訓、周煌等の書などである。これら主要なものは、マイクロ複製本を作製して自由閲覧になっている。なお現在、東恩納寛惇氏の全集（一〇巻）が、東京の第一書房から続刊中である。

(一) 真境名文庫

真境名文庫は、笑古真境名安興（一八七五～一九三三年、沖繩県立沖繩図書館第二代館長、郷土史家）の生誕百年を記念して、昭和五〇年五月二〇日創設されたものである。昭和四九年遺族から蔵書、原稿等が寄贈されたのであるが、さらに新聞・雑誌等へ発表された論文や稿本等を復写収集して、この文庫は創設された。蔵書三六冊、大正四年の『県史編纂史料』六冊、『沖繩二千年史』等の原稿、日誌、遺稿、書簡、新聞切抜等一七〇点、稿本や発表論文

等の複製七九点、計二四九点である。（『沖繩県立図書館要覧 一九七五年度』に「蔵書目録」及び関係資料を掲載）

(二) 山下文庫

山下文庫は、別名「砂糖文庫」ともいわれ、山下久四郎氏（明治三四年三重県安乗村出生、現在日本砂糖日報社及び日本菓糖新聞社々長）が、戦前沖繩県の糖業調査員嘱託等を歴任した関係で収集したものを当館に寄贈されたものである。昭和五一年六月三日創設で、その蔵書は、沖繩・奄美大島糖業関係資料三〇八点四八六冊、その他郷土資料二九八点四一九冊及び一般資料一八八冊、合計六二四九点九二三冊である。（『沖繩県立図書館要覧 一九七六年度』に「蔵書目録」掲載）

（とみしま・そうえい）

沖繩県立図書館主任司書 郷土資料室担当